

アジサイ植栽品種

① 清澄沢あじさい	⑬ 虹	⑲ 白妙	③⑦ フラウサヨコ	⑤⑤ プリマ	○	⑦③ サンセット	○
② エゾアジサイ	⑭ アマギアマチャ	⑳ 伊予餅	③⑧ フラウヨシミ	⑤⑥ ドモトイ	○	⑦④ アルボレスケンス	○
③ プレジオーサ	⑮ マイコアジサイ	㉑ 伊予絞り	③⑨ ベネラクス	⑤⑦ 巨大八重	○	⑦⑤ 石化八重	○
④ くない	⑯ 緑星	㉒ 大虹	④⑩ ピンクシャワー	⑤⑧ マリンブルー	○	⑦⑥ マリエシー	○
⑤ 虹	⑰ クロヒメアジサイ	㉓ 舞妓	④⑪ シロガクアジサイ	⑤⑨ インマキュラータ	○	⑦⑦ キングジョージ	○
⑥ 八重咲アマチャ	⑱ アマギアマチャ	㉔ オオベニガクアジサイ	④⑫ ピンクムーン	⑤⑩ マダム・E・Mイエル	○	⑦⑧ トリコロール	○
⑦ アマギアマチャ	⑲ マイコアジサイ	㉕ 伊豆の華	④⑬ ホルセルフロット	⑤⑪ シーフォーム	○	⑦⑨ ミセスキミコ	○
⑧ マイコアジサイ	⑳ 緑星	㉖ 城ヶ崎	④⑭ ゴライアス	⑤⑫ ジューンブライド	○	⑧⑩ クロジクアジサイ	○
⑨ 緑星	㉑ クロヒメアジサイ	㉗ ナデシコガクアジサイ	④⑮ ハイソリヒギイデル	⑤⑬ ヨーロッパ	○	⑧⑪ フラウサクラ	○
⑩ クロヒメアジサイ	㉒ 江冠雪	㉘ フラウノリコ	④⑯ ザクリスマス	⑤⑭ ホワイトウェーブ	○	⑧⑫ ブルーバード	○
⑪ 江冠雪	㉓ 青海	㉙ センセーション	④⑰ ベイチー	⑤⑮ オオベニガクアジサイ	○	⑧⑬ フラウレイコ	○
⑫ 桃色ヤマアジサイ	㉔ 肥後絞り	㉚ クリスタル	④⑱ 十二単衣	⑤⑯ インターメディア	○	⑧⑭ フラウブルーレイコ	○
⑬ 肥後絞り	⑳ 伊予の五月雨	㉛ ピーチ姫	④⑲ ウズアジサイ	⑤⑰ 隅田の花火	○	⑧⑮ フラウクヌエ	○
⑭ 伊予の五月雨	㉕ コモチシテダんカ	㉜ フラウカヅコ	④⑳ ブルーウェーブ	⑤⑱ 八重カシワバアジサイ	○	⑧⑯ フラウマチコ	○
⑮ コモチシテダんカ	㉖ 白富士	㉝ フラウヨシコ	④㉑ ミスヘップバーン	⑤⑲ ラマルネ	○	⑧⑰ フラウトシコ	○
⑯ 白富士	㉗ 剣の舞	㉞ マスジャ	④㉒ アルボレスケンス グランドイェロー	⑤⑲ カシワバアジサイ	○	⑧⑱ フラウマリコ	○
⑰ 剣の舞		㉟ フラウナルコ	④㉓ ファザーン	⑤⑲ アルボレスケンス アノベル	○		
		㉠ Marville Sanguinea	④㉔ アルトナ	⑤⑲ タマアジサイ	○		

\*既植のものには  
○印を付した

ネパールから導入したイワタバコ科植物について

平井健一郎・中山 長秀\*

1997年5月28日から6月6日まで、ネパールのカトマンズ(Kathmandu)とポカラ(Pokhara)を訪問した。植物を観察したのは、ポカラ北方に広がるアンナプルナ山群(Annapurna Himal)の、ナヤプル(Nayapur)からバグルン(Baglung)までであった。この時期、ネパールは乾季から雨季への移行期間にあたり、ポカラの街では、リンコスティリスやジャカラングが満開で、アンナプルナ山群では、白花のバラやプリムラ、インパティエンス、テンナンショウの仲間、ホヤ、デンドロビウムなどが咲いており、わずかながらシャクナゲが最後の花を付けていた。球根性ペゴニアも葉を展開し始めていた。特にイワタバコ科植物を注意深く観察したが、地生種の多くは出芽直後の状態であった。このような種を含め、数種を採集、導入したので記録する。

今回報告するイワタバコ科植物の内、*Didymocarpus leucocalyx* はカトマンズ南東部、ゴダワリ(Godawari)のプルチョーキ山(Phu-

\*財団法人広島市林業振興公社 森林公園

Ichoki)で、その他の種はアンナプルナ山群の標高約1,000~2,800m付近から採集したものである。また、これらのイワタバコ科植物をゴダワリ植物園のマラ氏に同定して頂いたが、*Chirita pumila*については、文献による説明とやや異なった点が見られ、別種の可能性があることから、その学名は参考として括弧内に記すこととした。

これらのイワタバコ科植物の導入・同定並びに栽培・管理について、貴重な御意見・御助言をいただいたマラ氏に、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

ディディモカルプス・レウコカリクス

*Didymocarpus leucocalyx* C.B.Clarke

ゴダワリ、プルチョーキ山の標高約2,500m付近で、苔むした岩場の斜面に自生していた。現地ではクムクム(Kum Kum)と呼ばれ、展



*Didymocarpus leucocalyx*

開前の若い葉が有用植物として採集され、この若葉には独特の芳香がある。

6月6日、まだ葉が十分展開する前の小株を、赤玉土、腐葉土を中心とする用土で平鉢に植え付けた。ゴダワリは、標高1,515mに位置し、夏期は20~30℃、冬期は最低-5℃まで下がる地域で、プルチョーキ山はかなり寒冷な環境と考えられたことから、最高気温25℃、最低気温17℃の冷房温室の棚下で管理した。

草丈5~9cmで、茎の先端付近に幅5cm前後、長さ7~10cmの葉を4枚展開させた。葉は対生で、頂芽付近では節間が短く葉が輪生しているように見える。表面は葉脈が著しくくぼみ、毛が密に生え、銀緑色を帯びる。葉縁には細かい鋸歯がある。頂芽から花柄を上へ伸ばし、その先端に球形で茶~濃紫色の総苞の中に蕾を多数付けたが、開花直前に花柄が腐り詳しく観察できなかった。

9月頃、株元に銀白色の縮緬状の越冬芽を形成し地上部は枯死した。この点において、イワタバコ (*Conandron ramondioides*) の生育型に似る。

耐寒性については、最低気温0℃近くなるビニールハウスと最低気温15℃のガラス温室で4~5日に一回葉水程度の灌水を行い、乾かし気味に管理し、調査している。

#### ディディモカルプス・プリムリフォルム

##### *D. primulifolium*

標高1,000~1,500m付近でしばしば観察され、苔や腐植土が堆積した岩肌へばりつくように生えていた。赤褐色の葉をもつ小株を *D. leucocalyx* と同様に植え付け、同様に管理した。



*D. primulifolium*

若葉は展開するに従い赤褐色から濃緑色へと変化した。短めの葉柄の先に、葉身の長さ14cm、幅12cmの大きな葉を持ち、ロゼットとなる。表面には艶があり葉脈が顕著にくぼむ。葉縁にゆるやかな鋸歯があり、葉全体に赤褐色の微小な斑点が散在する。

8月上旬、葉柄のつけ根から約7cm、茶褐色の花柄を伸ばし、黄緑がかった乳白色の総苞から濃赤紫色の花を多数付けた。花は長さ約3cm、花径1~1.5cmで雄ずい2本、雌ずい1本をもつ。一番最初の花が咲いた時点で花柄が腐敗したため1花の寿命は不明である。

9月頃、葉柄のつけ根に茶褐色の越冬芽状の小さな芽を形成し、その後は *D. leucocalyx* と同様に管理している。

#### キリタ・ピフォリア

##### *Chirita bifolia* D. Don

本種も標高1,000~1,500m付近の腐植土の堆積した岩の隙間などによく自生しており、本種の大きな特徴として、地下にアキメネスやコレリアと同様に長さ1cm前後の鱗茎をもつ。



*Chirita bifolia*



*C. bifolia* の鱗茎

既に芽の伸長した株をビニールポットに赤玉土、腐葉土を中心とする用土で植え付け、前述の冷房温室で管理した。

白~黄緑色の茎の先端に、葉身の長さ6cm前後、幅5~6cmの大きな葉と長さ約2cm、幅約2cmの小さな葉をただ一対対生させる。葉は軟質、円形で黄緑~緑色、表面に細かい毛を有し、葉縁には細かく浅い鋸歯がある。開花には至らなかったが、葉のつけ根に非常に微細な球形のむかごと思われるものを多数形成した。

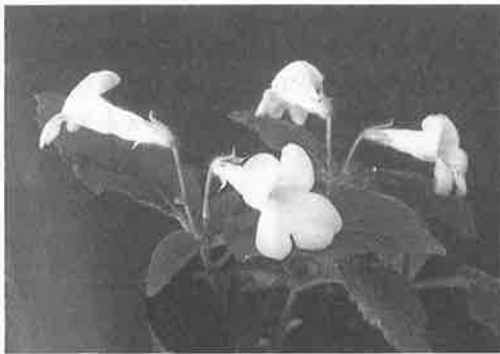
9月下旬、地上部が枯れ、最低気温0℃のビニールハウスで鉢のまま乾燥させ休眠させた。

### キリタの一種

#### *Chirita* sp. (*C. pumila* D. Don)

標高1,000~1,500m付近の腐植土の堆積する岩場で見られ、*C. bifolia*と同様に管理した。

草丈5~7cmで葉、茎に毛を有す。葉は長さ5~7cm、幅約3cmと細く緑色、軟質で先は尖る。葉縁にはゆるやかな鋸歯がある。同じ節に対生する葉は、わずかに大きさが異なる。8月下旬、3節目の葉腋から2~3cmの花柄を伸ばし、1花柄に1花ずつ開花した。花は長さ約3cm、花径2.5cm前後で花冠は5裂し薄紫色、筒状部の内側は中心程緑~白色となり薄紫の筋がはいる。1花の寿命は約1週間。本種は花も大きく観賞価値の高い有望種である。



*Chirita* sp.

9月中~下旬にかけて株元に根生葉状の芽を形成したため乾かし気味にビニールハウスで管理していたが、生育が思わしくなかったため最低気温15℃のガラス温室に移動させ、2~3日に一回葉水程度の灌水を行い管理している。

### リシオノツス (シシンラン属) の一種

#### *Lysionotus* sp.

ビレタンティ (*Birethanti*)・ティルケドゥンガ (*Tirkhedhunga*) 間の標高1,500m付近の古木に着生していた。現地では、1花柄に6~15輪咲いた様子が観察された。草丈15cm弱の大きな株を、駄温鉢に水苔単用で植え付け、最低気温15℃のガラス温室で管理している。



*Lysionotus* sp.

やや肉厚で艶のある緑色の大型の葉は、葉身の長さ16~18cm、幅5~7cmと細長く、一節に3枚輪生させ、葉縁にはわずかながら鋸歯がある。

約7cmの花柄に蕾を3個着け、9月初め開花した。花は長さ5cm前後、花径2~2.5cm、薄紫色で喉部に2本のレモンイエローの筋がはいる。花冠は5裂し、花弁内外に細い薄紫色の筋がはいる。5裂する萼は大きく外へ反る。花は *L. serratus* に似る。

### エスキナンツス・ヴァルヴィフォルム

#### *Aeschrynanthus varvifolium*

ガーラ (*Ghara*)・タトパニ (*Tatopani*) 間の標高約1,700m付近で木に着生していたもので、長さ10cm弱のつる状の茎を、駄温鉢に水苔単用で植え付け、*L. sp.*と同様に管理した。

エスキナンツスは他にも数株導入したが開花に至ったのはこの株のみで、他の株に比べ葉が非常に大型で、葉身の長さ約9cm、幅約6cmで楕円形、艶のある緑色、肉厚で先が尖り、全縁。



*Aeschrynanthus varvifolium*

9月初め、枝先に6花開花した。花は鮮やかなオレンジ色で長さ2cmと小ぶり。花冠は5裂し、上部2裂片の外側に2本のはっきりした深赤色の筋がはいり、下部3裂片は花冠付近ははっきり筋がはいっているが、萼に向かうに従い薄くなる。また、弁先も縁に沿って深赤色を呈し、長短2本ずつの雄ずいがある。花冠の下部3裂片の内側には、深赤色の斑点が1つずつある。9月中旬には開花を終了した。現在は最低気温18℃のガラス温室で管理している。

他の株は開花に至らず、同一種か確認できていない。

#### 〈参考文献〉

Hilliard, O.M. and Burt, B.L. 1971. STREPTOCARPUS. University of Natal Press.

Virginie F. and George A. Elbert 1984. The Miracle Houseplants. Crown.

呉征鎡主編 1986. 雲南の植物. 中国雲南人民出版社.

園芸植物大事典. 小学館.

Bailey, L.H. 1976. Hortus Third. Cornell University.

Royal Botanical Garden, Godawari. 1975.

## ブドウガメの開花・結実について

濱谷 修一・西山 岩平

ブドウガメ (*Cissus juttiae* Dinter & Gilg ex Gilg & M.Brandt) はナミビア原産のブドウ科の多肉植物である。当園ではサボテン温室内で植栽展示しているが、当園としてはこの度初めての開花を確認した。本種の開花は珍しいものではないが、果実の糖度などを調査したので、報告する。

### 栽培環境

例年、春から秋にかけてはかなり多く水を与え、冬にはかん水を控えている。温度は最低10℃で管理し、最高は25℃を越えると天窓が開くように設定している。寒冷紗等による遮光はしていないが、南側にプルメリアが植栽されているため、太陽の方角によっては若干光が遮られることがある。

本年(1997年)は、6月上旬にサボテン温室内の土壌の入替を行い、本種もその影響を受けている。現在は焼き赤玉(小粒)、日向土(小粒)、盆栽砂の等量混合土に植えられている。

### 開花・結実

1997年9月上旬に、開花後の花序を確認した。この時、幹回りが32cm、地際から茎の先端までの長さは95cm、茎の太い部分の長さは60cmであった。

その後、果実が1個結実し、10月28日の時点では長径2cm、短径1.5cmまで成長した(写真1)。果実は12月1日に手で触ると落下した。落下時の色はかき色であった。

果実はブドウと同様に、薄い表皮の内側に多汁質の果肉がある液果で(写真2)、果肉の中に種子を1個持っていた。落果時の果肉の糖度(アタゴ手持ち屈折計N1により測定)は8.8%であった。果肉をかじってみると甘柿に似た味がした。飲み込まなかったが、後で少しのどが乾く感じがした。

種子は長さが約1cmで、よく見ると半透明のゼリー状の組織で覆われており(写真3)、表面をボールペンの先でつつくと弾力があつた。

本種は肥大した茎が主な観賞の対象となるが、果実も美しいので、うまく房状に結実させることができれば好評を得ると期待される。

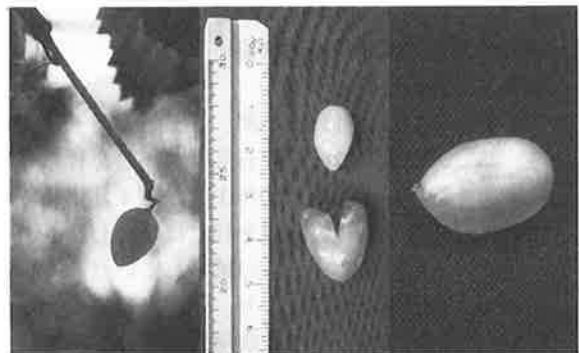


写真1. 結実中の花序 写真2. 果実から果肉を 写真3. 種子  
取り出したところ